

低用量アスピリンで高リスクの日本人高齢者の心臓血管イベントの予防効果はみられず

アテローム性動脈硬化症のリスク因子を有する日本人高齢者への、1日1回低用量アスピリン投与が心臓血管イベント発症を減少するかを検討した。

心臓血管病の既往がなくリスク因子として高血圧、脂質異常症、糖尿病のいずれかを有する60~85歳の高齢者を対象とし、日本国内1,007施設で2005年3月~2007年6月に14,464例が登録された。被験者をアスピリン群（腸溶錠100mg/日）と非アスピリン群の2群に無作為に割り付け、オープンラベルで追跡した。試験は追跡期間中央値5.02年の時点で、試験継続の有益性がないとのデータモニタリング委員会の判断により早期中止となった。アスピリン群、非アスピリン群ともに致死的事件の発生は56例であった。5年累積イベント発生率は、アスピリン群が2.77%に対し、非アスピリン群が2.96%と両群で同等であった（ハザード比：0.94）。非致死的心筋梗塞の発生率はアスピリン群0.30%、非アスピリン群0.58%とアスピリン群で有意に減少した（ハザード比：0.53）。一過性脳虚血発作についてもアスピリン群0.26%、非アスピリン群0.49%となり、アスピリン群で有意に減少した（ハザード比0.57）。しかし一方で、輸血・入院を要する頭蓋外出血はアスピリン群0.86%、非アスピリン群0.51%とアスピリン群で有意に増加した（ハザード比：1.85）。

今回の結果から、アテローム性動脈硬化症のリスク因子をもつ日本人高齢者への低用量アスピリン投与により、心臓血管イベント発症の予防効果は認められないことが示された。

出典：Journal of American Medical Association. Published online first. Nov 17, 2014;

doi: 10.1001/jama.2014.15690